

中川 牧三

撮影／赤城耕一

なかがわ まさみぞう
中川牧三 声楽家・101歳



日本イタリア協会の会長でいらつしやる「日伊両国の、音楽文化交流をはかる活動をしております。これまで、ソプラノの名花レナータ・テバルデイや、発声の神様と謳われるジーノ・ベッキといった、めったに来日しないイタリア・オペラの大御所たちの演奏会を実現させてきました。」

「昨年（中川牧三 生誕1世紀祝賀記念）として、東京、大阪、長崎でガラ・コンサート（記念演奏会）を主催しました。個人的に親しくしている海外の名歌手や、現役で活躍中の教え子たちが多数出演してくれまして、お陰様で大変ご好評をいただきました。」

「海を越えた人脈を、お持ちなのですね。」

「私は長年にわたり、欧米各国の権威あるコンクールの審査員を務めてきました。昭和34年、イタリアの「ヴェルディ国際音楽コンクール」に日本人として初めて招かれたのを皮切りに、以後スペイン、アメリカと、いずれも邦人初の審査員として招聘されました。多岐ときは、同時に9つの国際コンクールの審査運営に携わっていましたから、各国への移動だけでも大変です。しかも、そのほとんどが手弁当同然でしたが、これはやらねばならなかった。なぜなら、日本人の私が審査席にいるのといないのでは、コンクールに参加する日本人への評価に影響があるからです。」

「日本のオペラ界の父と呼ばれる所以です。世界に通用する日本人歌手育成を目的として創始したコンクール「イタリア声楽コンクール」は、今年で34回目になります。優勝者2名には、勉強に専念できるだけの留学資金を贈り、イタリアの国立音楽院へ授業料免除

※見出しの名前は、中川牧三さんの自筆です。

「101年も生きてきた実感は湧きません。夢のように時間が経っていたのです」

日本オペラ界の父。後進の育成に、今も情熱を傾ける

⇒戦前からテノール歌手として国内外で活躍してきた声楽家の草分け。101歳を迎えた日本オペラ界の開拓者は、いまなお後進の指導にあたっている。平成15年10月に大阪で行なわれたガラ・コンサートにて。

↓米国・ハリウッドの名門「チャイニーズ・グローマン劇場」で邦人初の演奏会を開き凱旋帰国した32歳の中川さん(中央)。昭和9年、東京・新橋駅にて。



の推薦入学の道を拓いていきます。そのような関係で、今も多いときには年に10回ほど、日本とイタリア間を往復しております」

現在も声楽指導をしておられる。

「忙しくて時間がとれないこともありませんが、平素は毎週自宅に弟子が訪ねてきます。ひとりにつき2時間と、声楽のレッスンにしては相当長めですが、それでも毎回、ふと気づくと時間をだいたい超過していますね(笑)。

私が教えている「ベル・カント唱法」というのは、日本では指導者がまだとても少ない。イタリア・オペラは、ベル・カント唱法なく

して成立しません。このベル・カントの普及こそが、日本のオペラ界における私の務めだと思っています。

そもそもベル・カントとは、イタリアの伝統的な歌唱法で、声楽の極致にあたるもの。日本語訳すると「美しい声、良い発声」の意味です。喉に無理なく、低音から高音まで伸びやかに心地よく歌える方法ですね」

イタリアで発祥した歌唱法ですか。

「これは一朝一夕に出来上がったものではないのです。古くはメソポタミアで発生して、ギリシア経由でローマに入った歴史を持っています。古代メソポタミアといえ、野外劇場。そこで何千、何万という聴衆に向かって歌うのですから、口先だけの発声法ではとても通用しませんね。

ベル・カント唱法では、その人が持っている自然な声を引き出すことがもっとも大切です。自然な声、その人の真の歌声が一番美しいのです。先生や他人の真似をして作った声では、ベル・カントは歌えません」

師匠の模倣から入る稽古事が普通です。

「日本やドイツのレッスンは、生徒は先生の真似をします。先生も、教えた通りにやりなさいと言う。しかし、イタリアを含めたラテン系の国々では、模倣からは何も生まれません。どちらが良いというのではなく、考え方の違いですね。

明治以降、近代日本の音楽教育はドイツを範としました。バッハが音楽の父で、ヘンデルが母。海外から招聘した音楽教師は、ほとんどドイツ人。当時の日本人は、ドイツ経由の音楽しか知らなかったのです」

中川牧三（なかがわ・まきぞう）

明治35年（1902）、京都市生まれ。ベルリン音楽大学、ミラノ国立音楽院、スカラ座歌手養成所、南カリフォルニア大学で学ぶ。イタリア、アメリカでテノール歌手として活躍後、昭和9年に帰国。戦後は〈全日本学生音楽コンクール〉や、国際水準の審査で名高い〈イタリア声楽コンクール〉を創設、国内外のコンクールの審査運営に携わる。オペラ界への功績に対し、イタリア政府より「カヴァリエレウフィチャーレ」「マルタ騎士勲章」「マルタ・グラン・アンバシャトーレ勲章」受章。

「8年前、米国から突然客が来た。 戦時中、私が收容所入りを阻止した ユダヤ難民。目頭が熱くなりました」

↓海外でも活躍中の教え子たち。マエストロ中川が生涯をかけたイタリア・オペラの普及は、愛弟子たちによって確かな実りをもたらしている。



ベル・カントとの出会いはいつですか

「私は京都生まれなのですが、子供の頃から音楽好きで、毎朝チャベルで讃美歌を歌いたいがために同志社中学に入りました。バイオリンも毎日5時間は練習。近所の方に「カラスが鳴かぬ日はあつても、バイオリンの鳴らない日はない」と言われたほどです（笑）。

本格的に声楽のレッスンを始めたのは、二十歳になる少し前の大正10年頃でしょうか。当時、モンテ・カルロ王立歌劇場の花形ソプラノだったオルガ・カラスロワ女史がロシアから亡命中だったので、芦屋のお住まいまで足繁く通いました。この方が私にベル・カント唱法を教えてくださいました」

声楽の出発点が、ベル・カントだった

「いま考えると、これは大変な幸運でした。とはいえ、先ほど申しましたように、当時の日本では音楽といえばドイツ。私も最初の海外留学先は、イタリアではなくドイツのベルリン音楽大学でした。昭和5年、28歳のときです。下関から船に乗り、釜山からシベリア鉄道でベルリンに向かいました。

この留学は、新交響楽団（現・NHK交響楽団）を創設して日本クラシック界の礎を築いた、指揮者の近衛秀麿先生と一緒にしました。筆頭筆頭であった近衛家とは、家族ぐるみで親しくしておりまして、そのご縁です」

留学生活のご苦労は

「あの頃は官費留学以外で洋行する日本人などいない時代でしたが、ベルリン・フィルを指揮されていた近衛先生が後見人だったお陰で、素晴らしい巨匠たちに師事できました。

指揮法はオット・クレンペラー、作曲はバ



◀身長180cmと、日本人離れした堂々たる偉丈夫。イタリアのボローニャにも自宅があり、今も年に数回往来。ジャケットから帽子、靴まで、すべてイタリアで求める。

ウル・ヒンデミット、バイオリンはカール・フレッシュユと、錚々たる顔ぶれです。声楽も世界的な先生についたものの、日本で学んでいた発声中心のレッスンに比べると、何か方向が違うような気がしていました。

ベルリン生活が1年経った頃、私の人生を大きく変える出来事がありました。イタリアからやってきたテノール歌手の演奏会です

——ベル・カントとの再会ですね

「その美しい歌声を聴いたとき、全身に戦慄が走った。『これだ、この声だ。何としてもあの声を知りたい。そうして近衛先生とともに、ベル・カントの本場、イタリアに乗り込んで行ったわけです。』

ミラノに到着した日の夜、世界最高峰を誇るオペラの殿堂スカラ座で観た『リゴレット』。これには腰を抜かすほど圧倒されましたよ。『このオペラを、必ず日本に持って帰ろう』

そう熱く語る近衛先生の目の輝きと興奮した声が、いまでも耳に残っています

——勉強はどのようにされたのですか

「ミラノ国立音楽院に入学と同時に、スカラ座歌手養成所の研究生になりました。いずれも日本人学生の第一号です。最初は膨大なオペラの譜面の暗記。日伊辞典など一冊もない頃です。歌詞の意味が分からないときは、まず伊独辞典を使い、それから独日辞典で調べるといった具合。発声に歌唱と、毎日死に物狂いで勉強しましたよ。

当時のイタリア大使は、後に首相となる吉田茂さん。私の兄（衆議院議員・中川源一郎氏）を通じてご縁があったものだから、大使館まで挨拶にうかがったのです。吉田さんは私の顔を見るなり『君、花札でできるかね』

——イタリアで花札遊びが催されるとは

「私などは恰好のカモにされましたが（笑）、それでも吉田さんの豪快な人柄と、ふるまわれる和食が魅力で、ずいぶん通ったものです。30歳になった昭和7年。テノール歌手として、ピアチェンツァ王立歌劇場で日本人初のデビューを果たしました。その後、音楽学を師事していた教授に追従して渡米。南カリフォルニア大学で勉強を続ける一方、ハリウッドの名門、チャイニーズ・グローマン劇場で邦人初のリサイタルを成功させました。

順調な演奏活動も束の間、昭和8年、日本の国連脱退の報とともに戦雲の翳りが忍び寄ってきた。街を歩いていると、私が日本人だと知るや、石を投げつける人もいた。やむなく米国での生活を断念して帰国したのです。太平洋戦争では陸軍将校として上海に赴き、

外交交渉を担当しました。日独伊の三国同盟の時勢、ドイツとイタリア両国に留学経験のある私に、白羽の矢が立てられたわけです。

当時の上海は、各国のスパイが入り乱れる魔都。情報戦と同時に、様々な文化工作に力を注ぎました。無名だった朝比奈隆君を指揮者に起用し、上海交響楽団を復興させたり、日本から次々に音楽家を招聘したり。ことに『歌姫・李香蘭』こと山口淑子君の舞台は人気を集め、上海民衆との融和に貢献しました

——戦中とは思えない華やかさですね

「この非常時に、楽隊などけしからん」と異を唱える参謀もいましたが、日本が堂々たる文明国であることを、大戦中だからこそ世界に向けて発信する必要があったのです。

アメリカのルーズベルト大統領が亡くなった際には、上海の5か所に市旗を立てさせました。またもや上層部から『すぐにはせず』と迫られた。私は『敵国といえども市意を示すのが騎士道だ。必ず軍艦一隻沈めたほどの効力がある。いったん掲げたものを降ろせば逆効果だ』と、突っぱねました

——軍上層部に逆らうのは、命がけの行為

「上海のユダヤ難民はみな収容所送り。これが戦中、ドイツに与する日本の方針でした。が、私は陸軍将校の権限において、ユダヤ難民の拘束を阻止した。それを人道主義、というのは大袈裟ですね。人間としての常識です。……時は下り8年前、アメリカから突然お客様が見えた。上海の収容所入りを免れて渡米。苦学の末に学者として大成された方でした。立派になられた姿と、あなたは命の恩人です。言葉には、目頭がじんと熱くなりました」

「今の若手声楽家は良いですよ、ベル・カントの域に達した人もいます。将来、必ず大成するでしょう」

戦後の活動について教えてください。

「私のテノール歌手としての生命は戦争によって断たれましたが、戦後はオペラの普及と後進の育成に全力でありました。」

大阪音大の音楽部長として、荒廃した日本の声楽界の再生を目指しつつ、関西初のイタリア・オペラ公演の実現に奔走したんです。

演目は「カヴァレリア・ルステイカーナ」に決めました。オーケストラは東京フィルハーモニーを招き、当時まだ学生だった五十嵐喜芳君（現・昭和音楽大学学長）らが出演。指揮から演出、訳詞まですべて私がやりました。

大阪の街を歩けば爆撃の灰が舞い上がるような戦後の混乱期ですから、衣装や舞台道具を揃えるのに難渋したのを覚えています」

演奏指導以外にもご苦労が

「もつと大変だったのが、東フィルのメンバー50人の食料の確保。お米は配給制で、外で食事をするには外食券が要る頃です。メンバーたちは家族に食べさせるために手持ちの外食券を使いたがらない。そこでやむなく皆のためにヤミ米を調達。このときは少々、危ない橋を渡ったりもしましたね（笑）。

その甲斐あって、公演は大成功。以後、「椿姫」「蝶々夫人」をはじめ、本邦初演となる「ルチア」「友人フリッツ」など、次々と本格的なオペラを上演して好評を博しました。

その一方、優れた音楽家育成のために（全日本学生音楽コンクール）を創設、今年で57回目を迎えます。また、長い歴史を誇る「日本音楽コンクール」では、声楽はもちろん、ピアノやバイオリンも含めた全部門の審査運営を、38年にわたって務めてまいりました。

この中から、ひとりでも多くの日本人を国際舞台に出したい。私のやっていることは遠距離砲を撃っているようなもので（笑）、そう簡単に報われようはありませんが」

現在の若手声楽家のレベルは如何ですか。「良いですよ。私は大いに望みを持ってます。教え子たちの中には、二十歳前後にして完全にベル・カントの域に達した人もいます。イタリア声楽コンクール、優勝者の中からも、イタリア留学で勉強を積み、スカラ座に出演できるようになった歌手が何名かいます。将来、必ず大成するでしょう。」

オペラは究極の総合芸術です。独唱、合唱、オーケストラに舞台美術。それらを駆使して、愛や生きる欲びを人々の心に訴えるもの。

「このオペラを、必ず日本に持ち帰ろう」と、近衛秀麿先生とイタリアで描いた夢。器のない日本で、オペラとベル・カントをどこまで根付かせることができるか。当初は途方もない夢にも思われましたが、近頃のオペラ・ブームや優秀な若手を見るにつけ、よくこんな早く定着したものだと思います」

戦後50年以上もの尽力。長い月日です。「先日も40年前の出来事を、ついこの前」と言ったら、娘に「さすが101年の歴史を生きた人の言葉だわ」と笑われました（笑）。

私は、101年も生きた実感がありません。好きなことをしているうちに、いつのまにか101年が経った。オペラがあったから生きてこられました。歌がなかったら、とうに死んでいただいでしょう。オペラとともに、素晴らしい音楽とともに歩んだ人生です。まるで、夢のように過ぎた101年でした」